

槐

かい

創刊25周年記念特集号
創刊300号記念特集号
平成28年7月号

岡井省二創刊



平成二十八年七月一日発行 第二十六卷第七号 通巻第三〇一号（毎月一回、日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

「槐」 創刊二十五周年を迎えて

「槐」は平成二十八年六月号で通巻三〇〇〇号を達成し、この七月にめでたく創刊二十五周年を迎えました。創刊主宰岡井省二先生のもとで十年、その後を継承した私のもとで十五年、通算二十五年が経過しました。ここにこうして通巻三〇〇〇号達成と創刊二十五周年を皆で祝うことができ、本当にうれしく思います。

十月には記念大会を開催するので、同人、会員の別なく奮って参加ください。共に慶びを分かち合いましょよう。

核の傘

高橋将夫

影踏みの影げんげ田に逃げ込みぬ
挿木して根をはるまでの親心
手をかけた分だけ辛い春大根
吐息では紙風船はふくらまず

誠実な台木を選び接木せり
貝寄風やむかし水軍いま海軍
鳥は声鶯餅は色でもつ
花鳥賊の墨が作りし闇かとも
反対のための反対万愚節
飯蛸の足ももつれる議論かな
春雨や核の傘から出ずにをる

槐安集

水野恒彦

沖遙か頭つ海光や涅槃像
廻廊の途中にて蝌蚪生まれけり
うつつなき蝶の魂舞ふ奥吉野
戀しむちを触れてゆくなり桜東風
たましひを奪はれに行く桜の夜

加藤みき

葉櫻や秘佛公開はじまりぬ
八十八夜遠きを過ぎるまあるき灯
ちんまりと青鬼灯の生れてあり
柿の花しつかり枝にとどまりて
青梅の美味さうな香を放ちけり

中島陽華

佐保姫や碁笥を抱へてうろうるす
蛇出づや紅のつきたる油とり
入籍の一本締めや涅槃西風
羊がいつぴき羊がにひき涅槃かな
声明や盆梅の香のいや高し

竹内悦子

雲吞を啜つてゐたる櫻かな
麗かやトリムの森に鳶の舞
にんげん大阪場所を叩はたき込んだり春一番
変哲もなき石の祠と山櫻
鎌倉は雨の櫻となりにけり



雨村敏子

古池を探してゐたり花の山
葱坊主弾けむばかりの空があり
春昼や水晶玉の数珠もちて
絵馬にある般若の口や花吹雪
まへがきもあとがきもなし桜かな

本多俊子

たんぽぽや空の青さと何語る
西行のさくらの散つてしまひけり
筍の断面にひしめく未来
鳥曇りフランスパンの尖りたる
砂文字のけされしあとやさくら貝

近藤喜子

鳥の声する清明の雨の中
不揃ひのそのままが好き葱の花
囀や天地のあはひ揺らぎをり
光より影にこころを春愁ひ
わたつみの綺羅しきつめし雲に鳥

瀬川公馨

春泥やありもせん支柱を掴みたる
大地震や天ぷらうどん柿若葉
空想に耽つてゐたりはな椿
おちうどをけしかけてをる山櫻
青嵐ヒステリックに転ぶ缶

久保東海司

風の向き変り相搏つ野水仙
枝移りの鴨の導く花の寺
振付の微に入る都踊かな
一陣の風が蜂起の杉花粉
蛤の眼覚め口より泡を吐く

柳川 晋

斎王の引き摺り下ろす春北斗
リーダーもグラマーも皆卒業す
三百年振りに蛙は古池に
暮れかねて妖怪の身の置きどころ
地震なみの尾が見え隠れする海市かな

熊川暁子

近づきて花のひかりを失ひし
視力表の文字にまぎれて春蚊生る
春愁の捨て場となりぬ水たまり
水温む肩の凝らない人となり
花ふぶく神の世すこし垣間見し

寺田すず江

こつくりさんこつくりさんほら桜だよ
みづけむり立て夢を追ふ田螺かな
天日にたけくらべして葱坊主
無重力になりし蛙の目借時
日の量や望みを包み春筍

岩下芳子

大干潟蟹が穴掘る我も掘る
動くものに戯れたし怖し子猫かな
寄居虫の住み替りたる身ひとつ
槐咲く大樹の洞をのぞきたる
水軍の島でありけり海桐咲く

近藤紀子

花の影のせてふらここ揺れてをり
花筏乱して進む鯉の群れ
遊園地の子の聲濡らす花の雨
葉桜の小暗きところ何かある
白き骨のからびし音や花の別れ

岩月優美子

天帝の笑顔ふらここ高く漕ぐ
春霖や明日の宙へ夢を描く
一面の菜の花に見る安堵かな
海原へ匂ひ返して焼柴螺
匂やかに万物つつむ春の闇

竹中一花

蟬丸や卯の花腐しの関を越ゆ
北緯四十度ハーブサラダの春を盛る
杉菜野へ雨太く来る交野かたのかな
地酒地鶏春の山菜大盛り
朝の日や蜻蛉生れたての顔

前田美恵子

三本の矢は折れ難し涅槃西嵐
ためらひの傷跡ありし老桜
げんげ野に俄画伯の散らばれり
思ひきりでんぐり返り春の芝
蒲公英の野にある光集めけり

中田禎子

渦潮に山幸彦の招くこ糸
金色の海の道ありお中日
霞へと青春十八キップ消ゆ
つくしんぼ広々とある更地かな
鱧口の音やはらかき花まつり



槐市集

犬塚李里子

あかときの地震に揺れをり涅槃像
日を吸ひて柔き黒土種袋
晩年の眼に美しきさくらかな
夕されば星に囁く雪柳
胸底に少女のこころ春怒涛

井上静子

竹箒の磴を掃く音朝ぐもり
大宇宙に力士は塩を花吹雪
豆飯の緑に遠い人おもふ
藤の花大工の腰の道具かな
薬の切株に腰降したる

今井充子

のどけしやつぎあぐび移りたる
陽炎や坂登りゆく子らの群れ
前栽の古木の蔭に花馬酔木
生垣の剪定期を窺ひし
蒲公英やコンクリートの罅住処にし

岩田洋子

甘茶酌むアルミの薬缶大きかる
朽木橋蛸蚪百匹の住処なる
陽春や金剛力士五等身
秘めごとを紙風船につめてをる
花筏洗堰にて終演す



江島照美

少年は階を掃く花吹雪
花に酔ひ宴に酔ひつ人に酔ふ
たくしあぐモデルのドレス春爛漫
勿忘草忘れたくなる愛もあり
何気ない日々有難く霞草

岡田桃子

正面はここと智恵子桜見上ぐ
花咲くと詩人紹びませくに境
糸桜揺れてブラジル便りかな
石蔵を超へ枝垂れたる花の雲
日差し得て花守の眼の慈母観音

荻布 貢

一瞬の人智超えたる春の地震
御堂筋の雨になりけり花祭
風を読むグリーン周りや桜散る
四月馬鹿事務所荒しにあひにけり
ぐいのみにひとひら浮かぶ西行忌

久保夢女

礼深き人よ桜は咲き満ちて
花の時のちの時よ仲好くす
歌が出て手拍子が添ふ桜かな
足も手も浮かれ浮かれて花の雲
大丈夫一期一会と花かがり

後藤マツエ

飛花落花土に還るや人もまた
囀りや急にわき立つ旅心
人生の苦き出発卯月往く
葉桜やすでに今年の花忘れ
げんげ田や古墳の主の逍遙す

阪倉孝子

吾が道は往路のみなり雁帰る
靴あとの楽しき親子春の泥
春昼やあぎとのゆるぶ鬼瓦
内股に歩く家鴨と春惜しむ
花衣へやさしくたたむ今日の幸

槐集

高橋将夫選

形から入る生き方 遍路道 大阪 江島 照美

金瘡きんそう小草こそう活断層に蓋をしる

桜湯に解きほぐさるる蟠り

哲学も無学も楽し花の道

春光は人の心を操れり

春天を越えむと銀翼高度上ぐ

まだ誰も知らぬ花園さがす蜂

収穫は一片の詩ぞ種を蒔く

この馬も春野駆けしか馬油まいう塗る

子猫まづ甘えることを覚えたり

紋白蝶朝のひかりを織り交ぜて

石垣苺魔女となりゐて摘みにけり

筍飯家族の顔がそこにある

たんぽぽのぼつぽつぼと野の白し

花万朶杖ついて行く今がある

榎かりん植咲くやさしき花に翳のあり 岡崎 吉田 順子

逃水を追へば命の水の音

森の樹に白き花増え夏来る

残照の湖に水尾引く残り鴨

沙羅の花この一天をいつまでも

チューリップの芯より侏儒よ飛んでこい 犬塚李里子

春眠や夢のつづきの雨の彩

春愁や夕べ鏡を拭いてをり

老いたりし桜大樹に魔の潜む

聖母月ひときは輝るや太白星

春の虹あわあわとして夢つつむ 柴田 靖子

淋しさとあन्दの時を残る鴨

ふつふつと遠き日のこと水草生ふ

藍若葉あまたの命はぐくみて

大海の神のふところ和布刈

銀河往来 高橋将夫

春光は人の心を操れり

江島 照美

寒い冬が終わり春が来ると心が浮き立つ。心が惑わされるとしたら春の光のまぶしさのせいなのかもしれない。

〈形から入る生き方遍路道〉の句は一つの処世訓。「威儀即仏法」、「形そのものが精神そのもの」「態度そのものが道そのもの」「修行そのものが悟りそのもの」。そして、今は「俳句そのものが人生そのもの」と思ふ。

〈金瘡小草活断層にふたをしろ〉の句、金瘡小草（きざらんそう）は別名ジゴクノカミノフタ。後は説明するまでもない。

まだ誰も知らぬ花園さがす蜂

有松 洋子

蜂が花を求めて飛んでいる景。「花園さがす」に人生を感じさせられる。

〈春天を越えむと銀翼高度上々〉の句の「春天を越えむ」（収穫は一片の詩で種を時く）の句の「収穫は一片の詩」の感性に共鳴した。

〈子猫まつ甘えることを覚えたり〉の句は、育つということの本質を捉えている。

〈この馬も春野駆けしか馬油塗る〉の句は、馬と馬油の取り合わせが面白い。汗で濡れた馬體がまぶしい。

箱飯家族の顔がそこにある

犬塚 芳子

何でもない食事風景だが、「家族の顔がそこにある」に心を打たれる。幸せな日常の中で、「家族の顔がそこにある」なんて

意識しない。作者にとつて、「家族の顔がそこにある」は一つの大きな感動であったのだ。事故後の長いリハビリ生活を克服して杖で歩けるまでに回復した作者ならではの感動なのだ。そして、〈花万朶杖ついで行く今がある〉。そして、〈紋白蝶朝のひかりを織り交せて〉の句のなんと美しいことか。

桐植かりん咲くやさしき花に翳のあり

吉田 順子

桐植のかすかな翳を捉えた感性の一句だが、作者の句はやさしさが特徴だと思つている。それは、〈沙羅の花この一天をいつまでも〉の句にもみられる。

聖母月ひとときは輝るや太白星

犬塚李里子

作者にはシャープな感性の句が多い。掲句は「聖母月」でやわらかな感じの上五だが、配されたのは太白星（金星）。

大海の神のふところ和布刈

柴田 靖子

和布を刈る海を「神のふところ」と見たところに作者自身のふところの深さを感じる。精神の風景。

恋の猫髭の先まで焦がしをり

平野 多聞

恋焦がれるというが、掲句の恋猫は髭まで焦がしたという。発想が愉快。俳諧。

〈発心の橋を渡れば卯月かな〉の句、何かをしようと思ひ立つて橋を渡ったら卯月だったという。発心は菩提心を起こすという意味の仏教用語だが、卯月は田植や卯の花の咲く頃で、心の豊かさを感じさせる一句。

〈以下略〉